

悠々の河

26

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

得度

静かにゆっくりとした住職の語り口に、彌兵衛は我に返り、先程までの自分の行動を恥じていた。振り上げた拳の持って行き場の無いような、そんな気持ちである。

「のう、彌兵衛どの。あの小さな雨粒でさえ、たくさん集まれば大洪水となる。雨垂れは、長い間には石をも穿つと言うではありませんか。村の人々も、貧しくて、年貢米を作ることで生きて行くための夜鍋仕事で、彌兵衛どのを助けてくても助けることが出来ないのだと私は推測しております」

「……………」

「村の衆の手前も有るでな。抜け駆けする勇気の有る者もおりますまい。あそこまで彌兵衛どのが一人でやってこられたのですから、気負わず、自然体で進みなされ、百姓が田を耕すように、樵が木を切るように」

「ほんとうに、そうでしたなあ」

彌兵衛は肩の力が抜けて行くのを感じていた。

住職は、さらに続けた。

「人間、悟りの境地に入ることは、何事が有っても、決して動じない心を持つことだと言います」

「そうでしたなあ」



画 高田勲

「先の見えないことを焦ってはなりませんぞ。

今日は昨日の続き、明日は、今日の続きで有りますからな。人の一生は、短いようで長い、長いようで短い。他人さまの最期を見送らせてもらう拙僧も、心穏やかな時ばかりでは有りませんぞ」

住職は「もう一服、いかがですか」と茶を勧めた。

「娘のゆうに導かれて、ここにやって参りましたが、有りがたいことでした」

彌兵衛の心は、久々に潤いを見せていた。

このことが有って後、正徳三年(一七二三年)一月、彌兵衛は、正林寺で得度した。

彌兵衛は新たな気持ちで、再度、岩山に挑んだ。

——百姓が田を耕すように、樵が木を切るように、自然体で進みなされや。——

正林寺の住職の言葉が、彌兵衛の胸の奥深くに有った。

来る日も来る日も、岩を削り、槌を振るう彌兵衛の姿は、以前にも増して力強く、逞しく感じられた。月日が経つうちに彌兵衛は夜も河原の作業小屋で過ごす日の方が多くなった。

家族の温かさの中にいては、生涯を岩山にかけるという決意が挫けてしまふと考えたからだ。——

けれども、家族をも寄せ付けない鬼気迫る形相は、クニや勘六、そして五郎太までも戸惑わせた。

お互いがお互いを思いやる心は擦れ違った。